

への躍進的第一步はすでに蹈みしめられて居る姿を見た時筆舌につくし難き感激を覺えた。

大陸を蹈んだ我々こそ見聞せるもの全てを以て新體制下の學生の覺醒をうながしこれをあらゆる部門に敷衍する事に依つて興亞聖業は遂行せられ行くものなる事を痛感した。

宗 教 的 努 力

樽 本 憲 正

吾人が人々との間にあつて生存して居る限り、そこには必ずその人間生活の規範たるべき道德が必要であり、又人が存する限りなやみは盡きず従つてそのなやみにおける人間の生命の問題に解決を與へしめて、より力強く人生の正しき規範道を踏み行はせしめる宗教の必要なる事は今更云ふまでもない事である。

私は今こゝで宗教、ミくに吾等日本人の育ての親である日本佛教について述べ道德との關係を明にします。宗教の不可缺重大性を述べ、以て時局日本の宗教界に訴えんとするものである。

凡そ吾人を生かし育て、今なほ日本國民の靈の糧となつて居る日本佛教は、その要素として二つの偉大なる眞理を藏含して居ります。その第一要素は一乘思想即ちすべての存在は一つの根本原理たる重々無盡の因果關係によつて成立し、この法を見る者は佛を見るのであり萬有は一々差別し一つとして同じものなく、亦同時に一つとして全く孤獨なるものではなく、實に相互關係して居るばかりではなく、同じく無量の縁によりて成立ち、それが現實に生起しては法な

り、諸法は等しく緣力を全うし完全なる佛性を現はさんとするものである。

歸する所、如何なる人も一味の佛教に入る事を得て、無我の大法を現はし得る事が出来るのであります。

こゝに於て何人もこの無我の力を表はし來るべき一切によつて生かされて居る云ふ法を見るが故に、報恩の生活となり、同情慈愛の生活となり、眞實の生命を全うする云ふ認識によりその生活任務を完うする力となり、慚愧感謝の間に向上發展の生活を現在せしめ得る事となる。

第二の要素はすべての存在を法、即ち緣起の實相と見てゆくのである。即ち宇宙の存在物たる人間は申すに及ばず一木一草に至るまですべて常に緣起の綜合進動を續け一刻も止まる事なく維新々々の發展をなして居るのである。人一度びこの宇宙の大事實に目醒めるべき、自覺に於ける魂の求道が覺他の清き行となつて表はれ、人間の根本生命の完全なる發揚により吾人はこゝに眞の救済の事實を見、この衆生濟度の大精神が智能の啓發、道德能率の向上となつて表はれるものであります。上述の如く日本佛教は二つの根本要素をその生命としつゝ、國民道德の根幹にその肥料となつて無我の奉仕を盡し來つたものであります。次に佛教が要求する實踐道德は何か？と云へば、それは言ふまでもなく四諦八正道の事實實踐であります。佛教は知の宗教と云はれますのは八正道の生活は正見から初まる故であります。即ち正見は正しい認識であり即ち心の三趣とみられる貪瞋痴の根本煩惱も自己の物の見方の不十分から來るものである。自己ありと執する心も宇宙の流れの中にありながら自己の身のみを常住なりと執する所に轉々として出離の緣ある事なしとの事實となつてくるのであります。これ皆無我の大道を知らず世界の喧騒に酔つて眞の宇宙の姿を見得ざる智の缺亡と思ふのであります。大經にも憍慢弊懈怠難以信此法とあります様に智の缺陷より憍慢、懈怠の宇宙の實相に目醒めざる姿となるもので、惡人なるが故に善人なるが故にと云ふ事に依つて起るものではなくして、唯内の宗教的認識の缺陷がこの様な結果をもたらすのである。

次に佛教の出發點たる菩提を究竟所たる涅槃は、四諦八正道の正しい認識に根づいて完全なる智慧力を求めて永久の生命力の中に生きようとするものである。

彼の哲學者カントは「汝の意志の格率が常に同時に普遍立法に妥當し得る如く行爲せよ」この定言命令に於て、道德はそれを行つた爲に幸福を得られるとか、快樂があるとか或は世間の習慣法律であるとか云ふ爲に行ふのではなく、唯無條件的に内なる道德律より發する尊嚴なる義務の觀念より無目的に慕進するのであつて、その義務をなす以外に何の條件も無い、これが純粹の道德でありこゝに眞の自由があるとする。これ佛教の正見が眞實の自覺無縛の生命自由の進歩に立つ自律的規律を欲求するも毫も形式習慣の束縛禁欲苦行を強制するものでなく、自由なきものは生命なし。眞の自由は覺醒より來る自制の道德生活に於て存するもので、此生活のみ眞に價值あり尊嚴なるものとするのである。又カントに依れば、しかし其の純粹の道德を云ふものを神の命じ給ふ所であるを信じて行ひ得るのが宗教であつて宗教の尊い所は道德を神が命じて居るを云ふ點にあるとする。斯様にその根底に神の力、神の命令を認めて居るのであります。

この無條件的な道德の理念こそやがてはカントをして宗教への要請を誘導してくるのである、即ち「天空なる星、我が内なる道德律」こそ宗教の前提として道德を認め、その道德に於ける無條件的な努力、——宗教的努力——無我的努力に漸次に進みゆくのであり、かくの如く道德は宗教によつて又宗教は義務にそむいた自己反省によつてますます向上せしめられるのである。然らば道德の推進力の本源である自己反省とは何か？信を以て能入となす佛教の大海が一度開けるや自己反省によつて自己の心中の底を深く掘下けてゆくとき驚惧に満ちた懺悔の凝視の前に三毒、煩惱妄念が追へぎも去らざる犬の如く纏ひつくのである、このとき能入の信によつて認識した佛法は惡魔の權化ならざるか悶えるのである、しかしこの惡魔こそ懺悔の響の中に金鼓の連なつて表はれ來る佛の第一要素でなくて何であらふ。三毒内に滿つ自己が現實の我にすゝり泣くとき、そこに表はれてくる無碍の大道こそ、小ざかしき人工にあらで自然法爾の眞理であ

り生命であり、涅槃であり現在の我を放下して更に進展した明日の自己に生きる所に眞の菩薩智があるのである。これ吾人の生活に於ては如何なる所にも疑を懷く驚異となり研究となり又如何なる知識に向つても不斷の研究となり、如何なる難關も破砕せずは已まじとする内なる宗教的努力の不退行が出來り天壤無窮の御神勅の教へる日迹たる日本人の目覺め彌榮への無窮の事實瑞穂なる大和の和の國土に生々佛教の不退の事實が目覺めの事實和の事實となり縁となりて發展して居るのであります。

かく見來るべき宗教道德は不二の關係にあり互にその内なる力を宗教的努力に求めて進んで居るのであります。かくる努力は認識を以て出發するが佛教もやはり宗教である限り認識以上の何ものかがその根柢となりて居らねばならぬ宗教獨特の信の問題が出てくるのであります。然らば佛教は何を信するか云ふ佛を信するのであります、即ち無我の大道に立ち無碍の行を行じ無價の衣に安宅せられた佛の人格の前に、こゝに佛ありと信する所に正見の根柢があるのであります。偉大なる釋尊に唯南無する姿こそ佛教の姿であり、こゝより佛法の因果も信ぜられ日常の生活も生きてくるのであります。佛自身は常に内なる惡魔と戦ひつゝ降伏の生活をなされて居るのであります。衆生慈愍の涙にぬれて群生荷を脊に出則無敵國外患者國恆亡と内なる三毒と戦ひ外衆生成就の大使命にますゝ勇猛精進、改良發明の生活こそいつはらぬ佛の生活であり宗教的努力なる生活であります。それこそ唯一の眞實道であります。煩惱の發見、惡の發見は深きく自己反省によつて得られるもので斷ち難き業障にすゝり泣くとき天いよく高くして地いやましに深し(ペンイズハイ、ホールイズディーブ)となり、光りいよく明にして闇いよく暗しの銳光如來の姿がありゝゝ眼前に發見されてくるのであります。元祖上人も「烏帽子もきざる男也十惡の法然房愚痴の法然房が念佛申して往生せん云也」を仰せられて居る如く念佛生活こそ、宗教的努力の生活であり、無我の生活であり、知恩感謝の生活となりてますます光明に照された明るい正しい生活になるのであります。

吾人はこゝに於てこの宗教的努力こそ法爾自然の努力であり絶對的なるものであり、法爾なる故に易行なるものであり、人間生命の眞の糧たらしめるものである。元祖上人をして自覺々他の行を滿ぜしめたのもこの宗教的努力である。キュリ夫人をしてラジウムを發見せしめたのもこの無我の努力であり、この努力こそ吾人の生活をより新な生氣あるものたらしめ時局下の日本になくてはならぬ努力であるを信じてやまぬものであります。

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。